

# 春風秋霜 9月号

令和3年9月1日  
島田市教育委員会だより  
教育長 濱田和彦

春風をもって人に接し、秋霜をもって自らを慎む 佐藤一斎

## 1 新型コロナウイルス感染症の対応について

近隣市において夏休みが延長され、保護者や子供だけでなく、教職員も不安を感じたことと思います。島田市では、現時点での夏休みの延長より、子供たちの学習を保障すべきと考えています。今後、校内における感染拡大が見られた場合には、休校や学年・学級閉鎖を学校と市教委・保健所等と協議し、対応を決定します。

デルタ株は感染力が強く、これまでのコロナウイルスよりも子供への感染力も強いと言われています。しかし、これまでの感染対策と大きな変更はありません。対策のより徹底が求められています。

そんな中、中学生のワクチン接種が予想以上の伸びを示しています。8月30日現在における予約率が71.6%となっている上、接種率も中学生1回接種：62.5%、2回接種：10.3%となっています。ワクチン接種は強制ではないという文書を配布したのにもかかわらずこのような結果は、ワクチン接種による感染率や重症化リスクの減少が周知されているからだと思いました。ワクチン接種が、校内における感染抑止につながることを期待したいものです。また、家庭内感染が増えている現状を考えると、保護者のワクチン接種が早期に進むことも期待したいところです。

## 2 横断歩道の渡り方

7月後半の休日に車を運転していると、ラジオ番組で横断歩道の渡り方が話題になっていました。出演者は、「島田市の子供たちは、集団登校で横断歩道を渡る際、最後の子供が振り返って感謝のお辞儀をした。」と、驚きとともに紹介していました。

一方、番組では横断報道では車は止まるものと、車が待っていることを気にせず渡る人も多いと指摘していました。以前、島田警察署長から「島田市は横断歩道で止まる車が他市や他県より多い」と聞いたことがあります。『横断歩道で車は止まるもの』という当たり前が通じない土地もあるのです。

市内には車が止まってくれた時にお礼をすることを伝統としている学校があります。一方、横断歩道の渡り方が悪いと指摘された学校もあります。車を運転している方のすべてがゆとりをもって運転しているわけではありません。中には急いでいるのにもかかわらず止まってくれる人もいます。

横断歩道を渡る時は、急ぎ足で渡ったり、会釈をしたりするだけで、運転者の気持ちも変わると思います。子供たちには、当たり前を当たり前にしないうちよとした行いが、気持ちよく止まってくれる運転手の増加につながり、自身の安全につながると伝えて欲しいと思います。

## 3 島一中寺子屋を参観して

8月3日（火）に行われた島一中の寺子屋には、4人の島田高校生や5人の校長OBの他、支援員や教員が参加していました。中学生の参加者は130人を超すと聞き、規模の大きな事業になったと驚きました。（5日も行われ、延べ223人が参加）



この寺子屋が実現できたのは、地域学校協働本部のコーディネーターである藤田和子さんの働きにより、高校生や教員 OB の協力を得ることができたからです。参加した高校生は少々緊張していたように見えてましたが、勉強している中学生も、学校の先生以外に教わるという適度な緊張感の中で集中して学習していました。

当日は志太教研の開催と重なったものの、外部の力を借りることにより開催できたので、今後の可能性が広がったと思いました。また、せっかく多くの方々の支援を得て行われた寺子屋なので、一人でできる学習より、質問したい学習や苦手な教科（課題）に取り組んでほしいと思いました。これは、求め過ぎでしょうか？

地域の力を借りて行うことは、子供たちの活動の保障だけでなく、地域にとってもプラスになると考えています。『地域が好きな子供は、島田市に住み続ける可能性が増える』と、過去のアンケート結果が示しています。地域と関わる中で地域の良さを実感した子供が、学校の在り方検討委員会の提言にある「地域を創る子供」に育ち、地域の活性化にもつながれば、CS や夢育・地育の成果だと思えます。



#### 4 平和祈念式典に参加して

8月15日（日）に行われた平和祈念式典では、高校生が主体となって平和七夕（竹飾り）を作ったり、島田市の平和都市宣言が読み上げられたりしました。また、子供たちの感想文も掲示されていました。

島田市の平和都市宣言は、何気ない日常生活の重要性や、今の平和が先人の努力のたまものということを大切にしています。戦争体験を語ることのできる人の減少が課題になっているので、この宣言の持つ価値を学ぶ場を作ってほしいと思いました。

### 肘かけ椅子

天野 幸浩 学校給食課長

#### 「夏の甲子園を見て」

第2学期が始まりました。新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言発令下ではありますが、整然と並んで登校する小学生、必死に自転車を漕いで登校する中学生の姿を見ますと、心がホッとします。

さて、夏の甲子園が閉幕しました。決勝は和歌山と奈良の姉妹校である智辯対決となり、和歌山高校が見事に頂点に立ちました。昨年12月に「イチロー」が非常勤コーチを務め、「ちゃんとやってよ」と選手たちに激励しているテレビ番組を思い出し、いい報告ができたのではないかと思います。

今年の夏の大会は「1週間で500球」という投手への球数制限がありました。2年前に岩手県大会の決勝に大船渡高校の「佐々木朗希」投手は出場せず、監督の判断に賛否両論があり、高校野球連盟が昨年からは実施しています。当然投手が多いチームが有利とされていましたが、驚いたことに背番号「6」とか「9」などの野手兼投手が多く活躍し、しかも打撃でもチームの主力となる選手が多くいました。コラムニストによると、準々決勝までの先発投手の8・9番打者の割合は51%。22年前は61%で、投手の打者性が取り戻されているとのこと。当然投手だけを任される選手もいると思いますが、投球制限ルールによりチーム編成や戦い方に大きく影響を及ぼしていると感じました。

私たちが現役の頃は投手で四番という選手が多くいた記憶があります。投球制限の導入により投手としても打者としても、また野手としても活躍する「大谷翔平」みたいな選手を夢見みながら、甲子園を目指す高校球児が増えていくのかもしれない。